

解答

一

問一 文章は一つの生きものであり、書く前に考えたことは別にそれ自身で生まれ育ち、無理にメモの筋へもどろうとすれば生気をなくし、推敲を重ねるとつくりものの文章になってしまうから。

問二 書き直しをする位だったら、新しく別のことを書く方が余程いいという考え方。

問三 あらかじめよく考えて書き、書いたものは推敲すること。

問四 書く前にすゝ移しかえる（技術）

問五 書く事が考えること

問六 常識人

問七 文字文章という具体的なものの運動

問八 ウ

問九 文章には起承転結がなければならないと信じこみ、無理にでも「結」を書き加えるから。

問十 C 一寸（いっすん） D 闇（やみ）

問十一 1 ウ 2 オ 3 カ 4 ア

問十二 文章を書くということ

新しい自分

二

問一 旅は小さな自分の世界を大きくできるものであり、自分の住む井戸から抜け出て世界の広さを実感すること、おどろきやとまどいが自分の反省となり、文化を発展させたということ。

問二 自分の属する世界と異なる風土や生活。

問三 砂漠には何もなくて生きてゆくのに必要なものだけしかないとすると、文化とは余計なものの集積ということになるから。

問四 文明社会に生きる人びとは、何もない砂漠に行くことで、余計なものの集積である文化から、どれが意味があり何が無価値であるか考えなおすことになるので、その人自身を見直すきっかけにするということ。

三

1 拡張

2 拝見

3 予断

4 遺伝

5 演奏

6 熟練

7 専門家

8 裏表

9 幼〔い〕

10 備〔える〕

解説

一

問一

——部①の後に出来がわるい理由が述べられています。何度も読み返しながら手を入れていったものは、息苦しいつくりものの文章であることや、無理にメモの筋へもどろうとすると、文章が生気をなくしてしまうこと、文章は一つの生きもので、それ自身で生まれ育ってゆくことをおさえながらまとめます。

——部⑦に含まれる「その部分は」とは、前に述べられている「余計な『結』」のことを言い表しています。そこで同じ段落の前半にある、「起承転結は」で始まる一文の内容を書き表します。

二

問一

「なぜ旅が読書と」で始まる段落に、旅とはどのようなものが述べられているので、——部①の直前にある「人々が井戸から脱けだすことによって文化を発展させてきたこと」とあわせてまとめます。

問四

本文の後半では、砂漠には何もなく生きてゆくのに必要なものだけしかないが、私たちはあまりにも余分なものを抱えこみすぎているので、余分なもののなかで、どれが意味があり、何が無価値であるか、それをもういちど考えなおす必要性を指摘しています。砂漠に行くことがこうした反省を自分自身にもたらしことをわかりやすく説明します。